『後撰集新抄別記全』翻刻

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō Bekki*

Nakayama Umashi's *Gosenshū Shinshō* was written in the early 19th century. It is a representative commentary on the *Gosenshū*. The *Bekki* was written as a supplement to the *Shinshō*. Both works today are rare books. As the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of the complete set, I have combined a report on this matter with a transcript of the hitherto untranscribed *Bekki*.

中山美石著『後撰集新抄』は全二十巻『別記』一巻から成ったらしい（静嘉堂文庫『新抄』巻六の巻末の広告に、「全二十冊、別記一冊」とある）が、文化十一年（一八一四）およびその後に刊行された版本は、「春上」から「恋六」までの十四巻と『別記』一巻の十五冊のみである。明治四十三年（一九一〇）から大正元年（一九一二）にかけて歌書刊行会から全巻が翻刻されたが、巻十七、十八（「雑」三、四）は欠本であり、『別記』は除かれている。巻十七、十八が欠本なのは、歌書刊行会本へ寄せた佐佐木信綱の序文によれば、稿本が早く散佚してしまったためらしく思われる。今回、聖心女子大学図書館に版本の揃いがあった（国書総目録にも聖心蔵は記載されていない）ことの報告をかねて、『別記』の翻刻をした。

本『別記』の体裁は、「目録」一葉、本文十九葉、「尾張書肆東壁堂製本目録」という広告一葉、奥付から成る。奥付は次のとおりである。

後撰和歌集新抄全十冊
同　附録　　全二冊
文化十一年甲戌葭秋発行
書　肆　京都風月庄左衛門
　　東都前川六左衛門
　　浪華森本　太助
　　尾張片野　東四郎

この奥付の「新抄全十冊、附録全二冊」の記載は、前記巻六巻末の「全二十冊、別記一冊」とも、現存版本の冊数とも大きくくい違うが、それが何を意味するか、調査していないので、指摘だけしておく。

翻刻に際しては、(1)和歌山大学紀州藩文庫本、(2)静嘉堂文庫本、(3)刈谷図書館本（以上版本）、(4)神宮文庫の写本を参看した。(1)、(2)は聖心本とまったく同じであるが、(3)は巻末に「年ふればわが黒髪もしら川のみづわくむまで老にけるかな」の歌を追加して、「○此歌の四ノ句、みつわくむといふ詞、古来より説々あり」として、検討を加えている。刊年不明であるが、文化十一年刊以後の増補版であろう。(4)は写本であるが、基本的に(3)と同じである。但し、(3)にくらべて、「目録」の部に、「檜垣嫗の歌のみつはくむといふ詞のこと」を新たに掲出し、本文部分の「年ふれば」の歌にも詞書を付加している点、(3)の版本の補正本が作られたかに思われる。

ところで『別記』の内容であるが、『新抄』の凡例に、「事長き論などは、別に記してそへたり」といい、『新抄』の本文中にも「別記に委しく云ふ」などとあるように、諸説の錯綜に対して検討考察を加えたものである。必ずしも文意明快とはいえないところもあるが、歌意を得る手続きは周到で、示唆に富んでおり、『新抄』の補注として十分翻刻の意味があると思う。

なお脱稿後であるが、小町谷照彦氏から江頭百合子氏の翻刻がある旨教えられ、借覧した。昭和五十九年三月発行の手書きコピー印刷で、「底本には国学院大学所蔵文化十一年版本を用いた」とのことであるが、巻末に「年ふれば」の歌をのせている点は、前記刈谷図書館本と同じで、増補版になるのではなかろうか。参照させていただき教えられるところもあったし、また後撰集注釈史にわたる解題を付すなど有益であるが、本稿において何箇所か、氏の読みを訂しえたところがあるかと思う。

なお翻刻にあたり山口佳紀、小町谷照彦両氏にお教えいただいた。感謝いたします。

凡例

一 底本は聖心女子大学蔵、後撰集新抄別記全、文化十一年版本である。

一 略体・異体の漢字は当用漢字または通行の字体に改めたものがある。例えば、哥→歌、鶴→鶴など。

一 仮名遣いはすべて底本のままである。

一 底本の句読点はすべて・であるが、適宜、。に改めた。また若干私に施したところがある。読みやすくと考えたためである。

一 底本の傍線――は――に直した。

一 底本の頁数は本文の右傍に、(一オ)、(二ウ) というように記した。

後撰集新抄別記全

別記目録(一オ)

○秋中巻　法皇と伊勢御との御贈答に一首落たりといふ論　初丁
○恋一巻　夢をかべとよむこと　二丁ウ
○恋三巻　伊勢御と贈太政大臣との贈答は仲平公との誤なるへき論　三丁ウ
○恋五巻　物あらかひ　七丁オ
○恋六巻　菅原おほひまうち君とある詞書の論并集中詞書の説　九丁ウ
○雑一巻　翁さび人なとかめその歌の四ノ句の論　十一丁オ

○同巻　しほなきとしたゝみあへてといふ詞書并同し歌の論　十四丁オ

○同巻　女ともたちの許につくしよりとあるは筑紫ノ国にはあらさる論　十八丁ウ

後撰集新抄別記(一オ)

秋中巻

亭子ノ院の御前の花、いとおもしろく朝露のおけるを、めして見せさせ給ひて

法皇ノ御製

白露のかはるも何かをしからむありての後もやゝうきものを（世は伊勢家集）

御返し　伊勢

うゑたてゝ君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらむ

○此歌御返しとはあれども、御製にこたへ奉れる趣意、露ばかりも見えず。又、御製の二三の御句も、さだかならぬさまなり。露のおきかはる事なるべけれど、そをかはるもとのみのたまはせむ事、いかゞなればなり。よりて考ふるに此二首、いせ家集には、亭子ノ(一ウ)御門の御前に、前栽うゑ給ひて、朝露のおけるをめでさせ給ひて、歌よめとのたまひければ、「うゑたてゝ君がしめゆふ云々。これは御かへし、「白露のかはるも何か云々とあり。かくては伊勢の御の歌の方先にて、詞書にもよく合ひ、院のは後なり。（かくても、いせの御の歌にこたへさせ給へる御意は見えず。）さて家集にて、此御贈答より百首あまり末に、亭子の御門、おりゐさせ給ふ秋、「白露のおきしかはれば百敢のうつろふ秋は物ぞ悲しき（此歌は、新古今集雑ノ下にも、亭子院おりる給はんとしける秋よみける、伊勢とて載せられたり。）といふ歌あり。こはかならず上二首と同時の事にて、さて詞書は、家集の方にて、亭子ノ御門の御前に云々、歌よめとの給ひければ、「うゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらむと、そ

の時の当意をよみ、これに御門の御返しはなし。さて又一首、おりゐ給はむ(二オ)とする事を、「白露のおきしかはれば百敷のうつろふ秋は物ぞかなしきとよみたるゆゑに、此歌にこたへさせ給ひて、「白露のかはるも何かをしからむありての後も世はうき物を、とはの給はせたるなるべし。かくては、二三の御句もかけ歌のおきしかはれば」といへるをうけて、「かはるも何かとの給はせしなれば、よく心得らるゝなり。かくて一首の御意は、白露のかはるがごとく我が位をおりむとするも、何かをしくはあらむ、世の中といふものは、あり〳〵ての後も、憂き事あるものなるをとのたまはするにて、「ありて世の中はてのうければといへるに、似たるおもぶきなり。かく三首ついでゝみれば、いづれもいと穏に聞ゆるなり。

(二ウ)恋一巻

源ノ巨城が通ひ侍けるを、後々はまからずなり侍ければ、となりのかべのあなより、おほきをはつかに見て、つかはしける

駿河

まどろまぬかべにも人を見つるかなまさしからなん春の夜のゆめ

○夢をかべとよめる歌は、下哀傷部に、女のみまかりて後、すみける所のかべにかの侍ける時、かきつけて侍ける手をみて、兼輔朝臣、「寝ぬ夢にむかしのかべを見つるよりうつゝにものぞかなしかりける。又、金葉集雑上、頼政家集などにも見えたれど、其はじめは、此集のころなるべし。さていかで夢をかべとはよむにか。たしかにはしられず。歌林良材には、夢をばぬるに見る物なればなり(三オ)とあれども、あまりにをさなき説のやうなり。又色葉集には、祐盛云、是は常の人の詞に、夢にもかべにもなどいふ詞なり。壁に見るといふは深き故あり。切利天に七宝宮殿

有。其壁には、人の昔のさま、こんずる末の身の姿、皆うつりてみゆるなり。それは夢にもあらず、現にもあらず。此歌は、家の壁に書たる手を見るが、かの忉利天の壁に、昔の事のうつりたるに似たるをよせてよめり。（忉利天ノ壁、正法念経也）といふを、季吟抄に引たれど、今世に行はるゝ色葉集には見えず。さて赤染衛門集に、入道殿おはしまさで後、御堂にまうでたりしに、いとさびしく、池のうき草しげかりしに、「いにしへのかべにだにこそありときけ池にうつれる影もみえなむ。又、兼輔集に、はやくなくなりにけると、（三ウ）もろともにせうえうせし所を、久しくなりて見て、「うたゝねのうつゝに物のかなしきは昔のかべを見ればなりけりなとあるは、彼忉利天の事にてよめるやうに聞ゆれば、色葉集の説やしかるべからむ。猶よく考ふべし。

恋三巻

女に、こゝろざしあるよしをいひつかはしたりければ、世の中の人の心さだめなければ、たのみがたきよしをいひて侍ければ　　在原元方

ふちは瀬になりかはるてふ飛鳥川わたり見てこそしるべかりけれ

題しらず　　伊勢

（四オ）いとはるゝ身をうれはしみいつしかとあすか川をもたのむべらなり

返し　　贈太政大臣

明日香川せきてとゞむるものならば渕せになると何かいはせむ

○右三首のうち、初の歌は、詞書にもよくかなひたるさまに聞え、後二首も、一わたりは聞ゆるやうなれども、猶やうありげなる歌どもなるによりて、よく考ふるに、いせ家集には、男の人の許にあるにやる、「飛鳥川ふち瀬

にかはる心とはみなかみしもの人もいふめり、返し、「ふちは瀬になりかはるなる世中にわたりみてこそしらまほしけれ、又返し、「いとはるゝ身をうれはしみいつしかとあすか川をぞたのむべらなる、かへし、「飛鳥川せきてとゝむる物ならば渕瀬になると何かいはれむとあり(四ウ)て、四首つゞきたる贈答なり。さて家集に、男とあるは、枇杷ノ左大臣仲平公の事にて、贈太政大臣時平公の事は、大かた男の兄とあり。ともによみかはされたる恋歌は、数多く見えたれども、其おもふき大に異なり。思ふに、仲平公と物いはれしは、論をまたぬ事なれば、又其御兄なる時平公とも物いはむ事は、あるべくもあらねば、いとうべなる事なり。されば時平公にむかひて、「いとはるゝ身をうれはしみなどいはるべきにはあらず。こはたしかにかたらひし人にあらでは、いふべき詞にあらざればなり。又、「飛鳥川せきてとゞむる物ならば云々は、たしかにかたらひ居る中にても、ゆゑなくてはいふべからざる言なり。そはまづ、心のかはりしさまなりなどいひおこせたらむには、いかで心のかはることはあらむ(五オ)。或は、そなたの心こそおぼつかなけれ、などやうにこたふる事、大かたの贈答のならひにて、右四首のうち、初二首の贈答などのさまなるべきに、さはなくて、「渕瀬になると何かいはせむなどいふは、我心にも、契を違へたる覚ありて、さて我も、それを欺く意こもりて聞ゆるなり。これらを以て見れば、本集に贈太政大臣とあるは誤にて、家集の如く、仲平公との贈答に疑なかるべし。かくて仲平公は、いせの御とかたらひ居給ふほどに、時の太政大臣の聟にとられ給ふ事ありて、其事をば、御みつからも心うくおぼしゝ事、家集所々に見えたり。又、いせの御も、それをいとあかぬ事におもひて、大和守なる、父の許にゆかれし事、家集にも見え、古今集恋五にも、仲ひらの朝臣あひしりて侍けるを、かれがたに成(五ウ)にければ、父が大和守に侍ける許へまかるとて、よみて遣しける、「三輪の山いかに待見むとしふとも尋ぬる人もあらじと思へば、なども見えて、明らかなり。されば右の四首の贈答も、其おなじをりの事としてみれば、さらにいぶかしき所なし。かゝれば、男の人の許にあるとは、かの太政大臣の聟になりて、其所に居

給ひしほどの事なるべし。「明日香川ふち瀬にかはる心とはみな上下の人もいふめりとは、其むこになり給へるをうらむるなり。「渕は瀬になりかはるてふ飛鳥川云々は、此度の事は、我心づからの事にはあらず。さりがたきすぢありてのことなり。それを世間の人の口には、いかにいふとも、そなたはよく〳〵此方の心の底を糺し見てしるべき事ぞや、噂ごとなどにて、さやうに恨むべき事にはあらずとなり。「いとはるゝ身をうれはしみ云々は、さやうにはのたまひても、他女にあひ給ふ事は違ひはなし。しかれはこなたをばいとひ給ふなり。かやうに君にいとはるゝ身の憂さに、思ひまはせば、今は何頼にすべき事もなし。世中は変りやすき物といふ事なれば、それをたのみに、もし又うれしき瀬にかはるをりもあらんかと、待べき事のやうには思はれ侍ると云て、さて、其世中のかはらんをまつうちは、先づ大和なる父の許へにても往〻侍らんといふを、ふくめたるなるべし。飛鳥川は、大和の名所なればなり。「あすか川せきてとゞむる物ならばふちせになると何かいはせむは、彼聟になり給ふ事は、仲平公も心うくおぼしゝことなるゆゑに、其意にて、世中の変革が、人の力にまかせらるる物ならば、いかやうにもすべけれども、人力の及ばざるは、川水のせきとめられぬ如くなるものなり。我が此度の事も、我が心まかせになる事ならば、心かはりしなどいかでかいはせん。全く世中の義理にて、しか恨らるゝも、いかにともせん方なき事なりけりといふ意に、そなたの大和へ行〻といふを、とゞめらるゝすぢならばとゞむべけれどゝいふを、ふくめしなるべし。かく見る時は上二首の飛鳥川は、常よみなれたる如く、人の心の変る事にたとへ、下二首は、大和へ行〻事と、そをとゞめがたき事とをふくめしなり。但、大和へゆくことをふくめたるならんといふは、すこししひたる説のやうにも思はるれど、なほ「飛鳥川をもたのむべらなりの、たのむといふ詞と、「せきてとゞむるの、とゞむといふ言には、ふくめたる意もあるやうなればなり。又三十六人家集といふ物は、いとおぼつかなく、うけがたき事多かるものなれども、あるが中に、伊勢貫之集などは、正しき物とみゆれば、とり用ふべく覚ゆるなり。

恋五巻

せうそこかよはしけれども、まだあはざりける男を、これかれあひにけりといひさわぐを、あらがはざッなりと、うらみつかはしければ

よみびとしらず

はちす葉のうへはつれなきうらにこそ物あらがひはつくといふなれ

○童蒙抄には、蓮葉のうらに、貝付と見えたりと見え、僻按抄には、此歌をはすなはと書て、それを釈したる人あり云々などあり。げに此歌、ふとうち聞たる所、蓮葉の裏には、必ッ貝のつく物ぞといひたる如く聞ゆる故に、古へより心得かねて、くさ〳〵の説は有しなるべし。されど此歌の趣意は、あらがはずして、つれなくてあるこそ、言にいでゝあらがふにはまさりて、あらがふにはあれといふ意にて、諺に、いはぬはいふにまさるといふがごとき たとへに、表はうつくしくつれなきさまなる蓮葉の、其裏に、物あら貝はつくなりといへるのみにて、蓮葉には、決て貝のつく物といひしにはあらず。よりて、貝のつくつかざるの所は、蓮葉にはかぎらず。蓴菜などにても、何にてもあるべきなれども、蓮葉は、あるが中にも、濁にしまぬなどもいひて、表の方ことに清らにて、つれなしといふべきさまなる物のうへに、水の上に浮出てさへあり。又ものあらといふ貝も、蓮池にあるよし此事は、末に委くいふべし。なれば、思ひよせたるなるべし。されど、蓮は池などにのみ生る物、貝はもはら海辺の物なれば、いかゞとも思ふべけれど、池などにも、田螺、ガウナなどいふめる貝もありて、物にもつくものなれば、蓮葉の裏にも、などかはつかざらむ。かくて物あらといふ貝は、紀の国人、山内ノ繁樹わが師、本居ノ大人のをしへ子なり。といふが、見たりとてかける文に云、「世にあやしき石をこのみ、まれなる貝をもてあそぶこそ、あぢきなきわざなれと思へりし事も有しか。一日、かぎりもなき貝もたる人の、おほくの箱の蓋どもひらきてみせたりけるに、きまほしき衣の色の紫のこきもうすき

も、やまとにはあらぬからあゐのはつ花染も、やしほの色なるも、錦(八ウ)など名におへるもあり。鶯、郭公、千鳥、あふひ、なでしこ、白菊、何がひくれ貝など、くさ〴〵まじへて、人の国の物までも、心にいれてあつめおきたれば目もあやに珍しく覚ゆるが中に、一つをとり出て、こは物あらといひて、いと古き蓮池にある貝なりといふ。いとゆかしきまゝに、手にとりてつら〳〵見るに、鶉貝といふ貝の形に似て、さゝやかに、みどりの色のすこし黒みて、うすらなる貝の、さしもめではやすべきかぎりにはあらねど、海つ物にはいといたうやうかはりて、さもありげにこそみゆれ。これなむ後撰集に、「蓮葉のうへはつれなきうらにこそ物あらがひはつくといふなれとよめる物なりける。此歌の此事、はやくより、いかなる物にかと思ひわたれるに、かうおもひもかけぬ人の許にて、ふとみきゝたるが、いとおかしきを、(九オ)日ごろかゝるものめでは、えうなき事なりかしなど、人にもいひ、心にも思へりしは、中々のひがことにて、物まなびせむ人は、何わざをもすつまじく、今なむ思ひ成ぬる。されど、これをも世のすき人の附会のしわざなりなど、おもひもどく人も有なむ。そはともあれかくもあれ、藻にすむ虫のわれからなどよめるたぐひに、名のひとしくて、形なども、もはら沼田などの泥の中の物と見ゆれば、うづもれて其物なるを、猶うけひかで、あらじなどいはゞ、それこそは誠の物あらがひにはあらめと、かつはをかしうなん。」

以上文詞ノサマモオカシケレハ全文ヲ記セリ 又平賀ノ国倫といふ人の著したる、物類品隲と云書にも、ものあらがひ、蝸牛の種也。陰湿ノ地、又池沼中ニモ生ズ。殼蝸牛と異ニシテ、肉ハ即一様也。是亦蝸牛ノ類也云々。此物歌仙貝ノ中(九ウ)ニ入ル。世人海中ノ貝ト思フハ非也とて、上の歌を引けり。

恋六巻

菅原のおほひまうち君の家に侍ける女に、かよひ侍ける男、中たえて、又とひて侍ければ

○此詞書、菅原の右の云々とあるべきを、ただ菅原のおほひまうちぎみとのみあるは、いかゞなるさまなれど、菅家にて大臣になり給へるは、此公にかぎりて、他にまぎるゝ方なければ、かくもかけるならんか。又は、右ノ字を写ッもらせるならんかなどおもひしに、夏目ノ甕麻呂云、こは撰者の心用ひ有ての事なるべし。そはいかにといふに、菅公左迁の事は、其世人も、少しいかゞなる御さだめのごとくに思ひ(十七オ)、おほやけにても、いはゞ悔いおぼしめされけむさまに聞えたり。よりて、ひたぶるに他の例の如く、当官を記て、菅原ノ権ノ帥の云々と書むは、何とかや心よからず思はれ、おほやけのしたにおもほすところも、同じさまなりけむ。さりとて、今現に改められたる官をおきて、菅原右大臣と書べきにはあらず。其歌をよみたる時によりて、其折の名など記す事なきにもあらねと、それはた、其人其歌によりての事なれば、かた〳〵を以て、わざとおぼめきて、かくは記されたる成べし。古今集九に、「此たびはぬさもとりあへず云々のよみ人を」菅原ノ朝臣とあるも、同じ類ひなるべしといへり。此説いと委くおもしろく覚ゆ。是につきて思ふに、すべて詞書に、其事をつまびらかにいひ難きすぢなどあるをりには、わざとおぼめきて書て、よく考ふれば(十八ウ)それとしらるゝやうにもし、又、其世にては誰もしりたる事などをば、ことさらにはぶきて記しなどする事、撰者の心用ひある事と見えたり。一二をいはゞ、秋中の巻に、はらからどち、いかなる事か有けむ、「君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬる物にぞ有ける」雑三にも同じさまなるあり。などは、必ゞ兄弟どちけさうの事ありしなるべけれど、しかたしかにいふべき時代にはあらざる故に、おぼめきてかきしなるべく、雑一に、西院の后、御ぐしおろさせ給ひて、おこなはせ給ひける時、かの院の中島の松をけづりて、かきつけける、「音に聞松がうら島けふぞ見る云々などは、西院の御庭なる御池の中島の松の事と聞えたるを、かの院の中島といひては、甚詞たらぬさまなれども、これ彼院の御池に中島あり。其中島に松ある事、又松ノ院といふもある事など、其世には誰もしりたることなるゆゑに、かくはぶきてかけるなるべし。これらは、家集に作者の記しおかれたるまゝに出されたるにも、又書改められ

たるにも、此心用ひはある事なるべし。すべて此集は、詞書のいとみだりがはしくて、論ふべきふしあるも多かれど、又げにみさかりなる世の手ぶりにて、近世人などのかけても及ばず、いとめでたしと見ゆるもいと多かりけり。よく〳〵心して、あぢはひ見るべきことなりかし。

雑一巻

仁和のみかど、さがの御時の例にて、芹川に行幸し給ひける日、
行平ノ朝臣(十一ウ)

○日本後紀、弘仁年中紀に、行幸芹川野といふ事、をり〳〵見えたるうへに、此集にもかくあれば、嵯峨の御時、芹川に行幸ありしこと論なし。袖中抄に、帝王系図に、嵯峨深草の御時に、芹川行幸といふ事をしるさずとて、此詞書を疑はしげにいへる説は、いかゞなり。

さがの山みゆき絶にしせり川の千代のふる道跡はありけり

○八雲御抄云、さがの山は、行平詠ス、非レス山ニ、只天皇の御事を、山といへるなり云々。為家卿抄云、嵯峨の山なり。非レス野ニ云々。げに嵯峨に山をよみたるは、此歌はじめなるべし。故レくさ〳〵の説はあるなり。然れども、実の山と見ざれば、歌の表聞えず。又此歌にもかくよまれ、後後の歌(此歌によりてよめる歌多けれども、又此歌にかゝはらでよみたるさまなるも有)にも、多く山をよみたれば、高き山にこそあらざらめ、山といふべき所もなからじやは。八雲の御説はしひたる御事なり。為家卿の説にしたがふべし。(十二オ)

おなじ日、鷹飼にて、かり衣のたもとに、鶴のかたをぬひて、かきつけゝる

○西宮記云、鷹飼ノ王卿、大鷹飼者、着ニ地摺ノ猟衣一、綺袴玉帯云々。などもあれば、若人めきたるよそひは、定

りたる事なるべし。但、袖に鶴のかたをしも縫はれたるは、此歌をかきつけむ料にても有べし。翁さび人なとがめそかりどろもけふはかりとぞたづもなくなる

○此歌、四ノ句古来より、今日而已(ケフバカリ)とぞと、は|文字を濁てよみて、さてそれにつきて、くさ〳〵の説あるは、此所の左注に、行幸の又の日なむ、致仕の表奉ける。」とあるなどを、わろく心得、又伊勢物語百十四段(十二ウ)に、「昔仁和のみかど、せり川に行幸し給ひける時、今はさることにげなく思ひけれど、もとつきにける事なれば、大たかの鷹飼にてさふらはせ給ひける。すり狩衣のたもとに書つけゝる。「おきなさび云々。おほやけの御けしきあしかりけり。おのがよはひを思ひけれど、若からぬ人はきゝおひけりとや」と有て、或注に、此歌を、滋春、けふは狩とぞと吟じかへて、帝の御気色なほりたり云々とあるなどによりてなるべし。げに、伊勢物語にては、今日而已の意ならむ事論を待たず。物語の詞はさるものにて、初の焼飯の山云々の歌をもはぶきたればなり。然れども、いせ物語は、事実の證にはとり難き事、さらにいふべきにもあらず。此歌、今日而已とよみては、行平卿の年老たる事をいはれたる、裏の意の方にては聞ゆれども、詞の表の方、鶴の鳴声の方にとりてあたらず。(十三オ)鶴の鳴声、いかに鳴てか今日而已(ケフバカリ)とは聞えむ。よくおもふべし。又、さがの山云々の歌にて見ても、述懐などの意あるべき事とは思はれず。「千代のふる道跡はありけりといはれたる語勢を、よくあぢはひ見るべし。此行幸をいとめでたき事に思はれたる意、言外にこもりて聞ゆるものをや。其歌につゞけて、いまはしげなる事などよまるべきにはあらざればなり。故ゝ今かた〳〵を考へわたして、よく思ひめぐらすに、今日はかりのは|文字をば清(ヘイ)てよみて、今日は狩(カリ)とぞの意とみる方穏なり。けふは狩とぞとは、鶴の鳴声、俗にからころ〳〵といへば、かり〳〵とも聞ゆるなり。今日は御狩なれば、鶴だにもかろ〳〵となけば、我も其鶴のごとく、今日は狩ぞとて、かゝる姿をしたるぞといふ意と見るべし。一首を俗言に訳していはば年ガヨツテ年寄(翁さび)カタギニ(様)、カウイフ姿形ヲスルデヤガ、誰モ笑ウテクダサルナイ。アレアノヤウニ、千年ヲ経テ年ノヨツタ鶴モ、今日ハ狩デヤト云テ、かろ〳〵ト鳴キマス。拙者モ其鶴ノヤウニ、今日ハ狩デヤト云テ、カウイフ姿ヲスル事デヤテ。とやうにいふべし。(十三ウ)さて此左注、いと心得がたき事あり。そは、三代実録四

十九云、仁和二年、十二月十四日戊午行幸芹川野云々。同五十云、仁和三年、正月十四日戊午、正三位行中納言兼民部卿陸奥出羽按察使在原朝臣行平上表云々とありて、此外に、御けしきのあしかりけむさまの事などは、露ばかりも見えず。（但十二月正月ともに、十四日戊午とあるは疑はし。一方は誤なるべし。）同年（仁和三年）の四月に、再度の上表して、致仕せられたる事も見えたり。かゝれば、此左注に又の日とあるはいかゞなり。もしは又の年の誤ならむか。（年）とあ（日）と草書似たり。又の月の誤といはむかた、字形は今少し近けれども、年を越て翌春の事を、又の月とはいふべくもあらず。故に年の誤なるべしとはいふなり。左注の又の日を、たしかに（十四才）翌日と見れば、何かゆゑなくして、しかあはたゝしく上表せらるべきにあらず。つひには伊勢物語などの意に落るなり。但、物語の意におつとて、いとふべきにはあらねど、さては三代実録のおもふきとたがふなり。正史の三代実録を捨て、いせ物語にしたがはむは、いと心ゆかぬわざなり。左注を、又の年としてみれば、何のさまたげもなく、其うへ翌年の上表にても、此行幸の時、年老たりし證には足りぬべし。さて此年老たりし事は、歌の上の句にかけて心得べし。

同雑一巻

しほなきとしたゝみあへてと侍ければ。

（十四ウ）たゞみ

しほといへばなくてもからき世の中にいかにあへたるたゞみなるらむ

○季吟抄云、蓼味（タデ）醋（ス）歟。或抄云、たゞみ貝の類なり。塩なき年の、からき世といふ心をかくいへり。かくからき世中に、又いかで蓼味あへけんとなり。塩なくては、たゞみあへしがたき事を、蓼も辛きにそへて読なりといへり。美石云、詞書を、塩無き年といふ事なりといへる、甚いかゞはしく、又、蓼（タデ）を蓼味（タデ）とはいふべくもあらず。此歌、

異本忠岑集には、しほのなかりける夜よめる、「しほたてばなべてもからき云々とあり。かくても趣意明らかにはあらず。故レくさぐさに思ひめぐらし、まづ試にいはゞ、詞書の、しほなきとしたゞみあへてとは、塩水葱と小嬴子を、調和てと、人のこひ侍ければといふ事なるべし。水葱は、万葉十六詠二酢醤蒜鯛水葱一歌に、醬酢尓、蒜都伎合而、鯛願、鯛願ハ、鯛師の誤なるべしと鈴屋大人いはれたり。吾尓勿所見、水葱乃煮物。又和名抄には、水葱、唐韻云、蔊ハ、水菜可レ食也。和名奈木と見え、延喜式、供奉の雑菜の中にも、水葱と見えたり。今世に、水あふひといふ物なるべしと、縣居大人万葉考の別記に委くいはれたり。かゝれば、いにしへ常の食用にしたる物とみゆれば、塩漬にしてもたくはへたるなるべし。小嬴子は、万葉十六長歌に、机之島能、小螺乎、伊拾持来而、石以、都追伎破夫利、早川尓、洗濯、辛塩尓、古胡登毛美、高杯尓盛、机尓立而、母尓奉都也云々。」神武紀の御歌に、加牟加是能、伊勢能宇美能、意斐志尓、波比母登富呂布、志多陀美能云々。」和名抄に、崔禹錫食経云、小嬴子ハ、似二甲嬴一而細小、口有二白玉蓋一也。楊氏漢語抄云、細螺ハ、之太々美。などある是なり。又大嘗祭式に、細螺二十坩と有。拾遺集の物ノ名にも見ゆ。其歌は「あづまにてやしなはれたる人の子は舌たみてこそ物はいひけれなどなり。すべて上に引たる證儀。又人この説をも挙て、古事記傳十九の巻四十五葉に、鈴屋大人委くいはれたり。さて歌は、上二句は、塩といへば名きく(回)もからきなるべし。なくてといふかなは、なきくの誤なるべし。あくとうえとやゝ似たり。なきくといふ詞に、水葱をこめたるなり。塩水葱をはたらかせて、かくよめるなり。小嬴子は、たゞみとのみもいふべければ、作者の名の忠見にとりなして、一首の意は、塩といへば、名をきくも辛きこゝちのせらるる物を、その塩の辛きが如くなる世の中に、何とてよく堪忍ぶ忠見そやとよめるなり。蘊に堪の詞をかねたるは勿論なり。

（十六オ）
追考

○難波人、入江ノ昌吾といふが著したる久保のすさびといふ書に、上の歌の事論ひたるを、このごろ見出たるに、はやくたゞみを小嬴子の事とはいはれたり。されどおのが説とは、異なる所々あれば、今其文を挙て、猶論ふべし。後撰集雑、しほなきとしたゞみあへてと侍ければ、忠見、「しほといへば云々。八代集抄云、塩なき年の云々。以上全文ハ上ニ記シタリ・故コヽニハノブケリ 是は何と釈したるにか。歌の意も通せず。もとより塩なき年といふ事あるべからず。蓼をタヾミといはん事もいかゞ。和名抄にも、蓼和名多天 とのみいひて、タヾミとはいはず。河海抄に引れたる、珍シキ物十列にも、蓼水をこそ、タヾミとはよみたれ。たゞみあへといへるは、蓼実蘇（タデミノス）の義とする歟。此実、あへて喰ふべき物（十六ウ）にあらず。かゝる釈あらんより、なきにしかず。又、五代集不審に、称名院殿 いかにあへたるとは、我身より堪忍するとなり。タヾミは、常の汁に用るタヾミ汁なりと。是も未詳。こと書のしほなきとしといふ事の答も見えず。今按に、しほなき年といふこと書は、伝写の誤なるべし。此歌、旧本歌仙集には、忠岑集に入て、ことば書、しほのなかりける夜とあり。しかれば、かんなによト書しを、とト誤り、あまさへとしと書つゞけたれば、句読もちがひ、甚しきに至りては、年と書る本も出きたるなるべし。されば、しほなき夜、したゞみあへてと侍りければと心得べし。したゞみは、和名抄云、小嬴之太美 是なり。あへては、同書云、蘇阿倍毛乃（十七オ） なり。按に、万葉集巻十六、所聞祢乃机之島能、小螺乎、云々辛鹽尓、古胡登毛美、此歌モ上ニ出セリ故此所ニハノブケリ 此小螺をから塩にもみといへるを見れば、いにしへ小螺は必塩にてあへもみて食せしと見えたり。一首の意は、塩といへばなくてもからき世の中とは、世の辛労をそへていふなり。いかにあへたるとは、いかにあやかりたるといふなり。古事記に、肖と書り。躬恒集に、「ひさにこぬ人をまつにやあえぬらんときはの恋と我はなりぬる、此肖に蘇をそへたるなり。されば、小螺あへむとするに塩さへなきに、何にあやかりて、かくからき世にふる忠見ぞと、自らの名をしたゞみにかけて、寒士のおもひをのべし

なり。（以上久保のすさび）とあり。此説も一説にはあれども、猶いささか心ゆかぬ事どもあり。旧本忠岑集には、塩のなかりける夜よめるとあれば、詞書にたゞみともしたゞみともなきを、此詞書にしたがひて、歌の末句を、小螺の事（十七ウ）とみるは、かへりてしひたるさまなり。又忠岑集の歌なるを忠見の名にかけてといひて、作者をば、此集にしたがひて忠見とし、詞書は、此集と忠岑集とを合せて義をなしなど、いたくいりくみたる説なり。其うへ四ノ句のあへを肖にかけたりといへるは、いみじきひがことなり。齏の意にいへるは論もなきを、齏は、仮字アへなり。（和名抄の仮字已に上に自らひけり。）肖は、日本紀応神の御巻に、肖（此云阿叡）なども有て、（こは今の世にては、誰も知たる事なり。）仮字アエにて違ふものをや。是は五代集不審にも見えたる、堪忍の意に疑ひなし。古今集秋下、「ちはやぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへず色づきにけりなどのあへに同じく、こらへ忍ぶ事なり。然れども、しばらく此（久保のすさびの）説によりて、詞書をば、旧本忠岑集と此集とのを合せて、しほのなかりける（十八オ）夜したゞみあへてと侍ければは、をりふしと、塩のたくはへなかりし夜小螺を齏てくれよと、人のいひければと云意に見て、「しほといへばなくてもからきは、口へ出して塩とだにいへば、其所に無くてもからきといふ意として解むにも、一首の意は、塩とだにいへば、其所になくてもからきこゝちする物、其うへ今夜は塩も払底なるに、いかにして此小螺をば、塩齏にしたる事ぞといふを表にて、三ノ句は、世ノ中に夜ノ中をかけて、さて裏の意は、世の中といふものは、辛労なる難儀なる物を、かやうに辛き世中に、いかにして堪忍びて居る、忠見我身なるらむといふ意と見るべし。されど上にもいへる如く、これかれをとりあはせて、さてからうじて解キ得るうへに、塩なき夜といふ事も、猶いかゞはしく聞ゆるをや。

同雑一巻（十八ウ）

女ともだちの許に、つくしより、さしぐしを心ざすとて

難波がたなにゝもあらずみをつくし深き心のしるしばかりぞ

大江ノ玉渕ノ女

○此歌の詞書に、つくしよりといへる事甚いぶかし。歌には難波といひ、みをつくしをよめり。そのうへ此作者玉渕女は、津ノ国によしありしさまなり。大和物語云、亭子のみかど、鳥飼院におはしましにけり。うかれめどもあまた参りてさぶらふ中に、声もおもしろく、よしあるものは侍りやととはせ給ふに、うかれめばらの申すやう、大江ノ玉渕がむすめといふものなん、めづらしう参て侍ると申ければ、あはれがり給ひて、うへにめしあげ給ふ。そもく、まことかなどとはせ給ふに、とりかひといふ題を、よくつかうまつりたらんにしたがひて、まことの子とはおぼさんとおほせたまひけり。うけたまはりて、すなはち、「あさみどりかひある春にあひぬれば霞ならねど立のぼりけりとよむ時に、みかどのゝしりあはれがり給ひて、御しほたれ給ふ云々」と有て、猶末長き御恵の事などまで、のたまひおきてさせ給へるよし見えたり。かゝれば、津ノ国鳥飼わたりに在し事論なし。されば、こは津の国と有しを、つくしとはあやまれるなるべし。（以上英石が考へたるなり）師云、此説一わたりいはれたり。されど、詞書のつくしは、誤にはあらず。淀川より難波までのほどに、つくしといふ地名ありしなるべし。その證は、催馬楽の難波ノ海の歌に、「なむ波のうみ、なむはの海、こぎもてのぼる小舟大舟、つくしづまでに、いまはこいのぼれ。やまざきまでに」とあり。此筑紫津といふ所に、玉渕が女は在しなるべし。

又云、美石が考へさきに見てうべなひてしを、大平、此ごろ催馬楽の難波の海の歌をとかむとするに、やがて此歌を證にひきたれば、此つくしは、かのつくしと一つなる事明らけし。依てかくいへるなり。